

○〈10年性〉をめぐって

～2010年4月 S・N

松下にとって、目前の対権力的な現れは表層の部分に過ぎなかった。より大きな〈闘い〉の回路を見据え、〈大学〉といった機構に象徴される幻想支配力学の深淵に向き合い展開されていたのである。

～一九六九年～の全国的な闘争を潜って以降、〈大学〉や知的領域に存在する者は、機構によって支えられた位置を解体的に媒介しながら、自らの言葉が指し示す方向をあらゆる場で表現し切っていこうと試みる場合にのみ、表現者として存在しようと考えていた。それは単に可視的な大学という枠に止まらず、人類が言葉を持って以来の全テーマの再対象化を眺望する視点であった。

'70年11月の南山大学新聞における松下の講演記録（発言集1に収録）には次のような発言が見られる。

「～つまり、事実の意味というのは、過去形ではなくて未来において始めて生きるというか、開始される。だから過去形の実事を未来形の実事性として論じない限り、粉碎する他ないというのが、私の内部に湧き出ている声なのです。またその事実の意味を管理者だけが判断しうるのではなくて、その事実に関連を持つ全ての人が、それを判断しなければならない、と思うのです。～」

自身の処分事実に関連する発言部分であるが、処分事実の問題を超えて全ての〈事実〉性の判断原則として様々な局面で応用された。「知識人ないし大学教師が権力と対立するものだ」という六〇年安保の段階では誇示しえた神話が崩壊していく闘争の特質に次のような視座を提起する。

「～むろん、その学生諸君の位相にくらべれば、教授会メンバーの責任というものは、はるかに質的にも、大きいわけです。まず私たちはそれを批判しますけども、私たちは一人一人なんらかの形で、権力に道をひらいているような存在をしいられていると思うのです。

どんな生き方をしようとも、体制なり権力に道を開くというか、自ら力をかけてしまうという風な位相におかれていると思うんです。そして、それを、決して切り捨てずに、その位相そのものを見極めながら、それを、共同の批判の対象として、展開していく、そういう非常につらい、苦しい作業が、今後、私たちの前に課せられているのであって、単純に、自分は反権力、反体制と言い切ることはいけないし、不正確だと思います。つまり、権力と知識人存在の一体化と言いましたけれども、知識人存在というのは、広い意味で私たちすべての、ことばを行使する存在すべてを含むわけであって、私の処分者に対する批判の仕方が、自分自身にも向けられてくるような、そういった根底的な弾劾というものが必要だと思います。～」

「自己批判」いう既に内部風化していった言葉ではおおいきれない方向軸が明示されている。今後生じうる新しいファシズムについては、次のように述べる。

「～うまくいえませんが、一見、平和であり、一見善良であり、というふうな存在の総体が、実は何かを圧殺していってしまう。そういう段階に来ていると思うのです。おそらく、単なる戦後史過程というよりは、近代市民社会の過程が、全体的にある破局に直面しているのであって、つまり、近代合理主義から見て日常的なこと、正常なことと思われていた基準が、全部破産して、同時にそれを否定したり、疑ったりする存在を皆殺しにしていく、そういうふうな予感がするのです。～」

この予感を妄想的である、と一笑にふすことはできない。21世紀にいたり、個人に許容される幻想性の振幅範囲がますます固定化され、突出しようとするものをこそって削り取っていく〈幻想的地ならし〉が加速していくのを感じざるをえない。新しいファシズムは、〈異物的存在の内側から崩壊を進め、〈皆殺し〉のための様々な〈武器〉を社会の諸層に埋め込み行使する。

「～明確に表われている強いられた共同性は、実は、この全社会をおおいつくしているのではない。むしろ、権力の意味を深化し、拡大しつつ強いられた共同性の意味をいたるところからとりだしていくことこそが、まだ生まれていない〈共同性〉という表現に到達する一つの道ではないかと思うのです。

その場所は、ただ単に、大学とか、組織とか、労働の過程にとどまらず、自分が存在しているあらゆるところに、あらゆるきっかけを通じて、提起されているし、それを発見しなければならないと思います。～」

'69年4・28首都における沖縄闘争の共同被告人であった〈 〉氏は、こういった松下の発言が指し示す展開過程に交差する〈10年〉を潜って後、大学教師になった一人であった。友人として正直驚き、うれしさと同比重の不安も抱いた。あえて〈敵地〉に切り込もうとする彼の勇気に刮目する反面、自ら担ったテーマをどのように繰り込みながら、職業世界で生活的に折り合っていくのだろうかを揉んでもいたのである。

'80年代に入り、一般的には見えにくい十年越しの〈大学〉闘争状況は、関西以西で加速度を増しつつあった。大学教師数名の共著とされた「ドイツ語の本」の出版過程で、本から排除された松下を含む〔自主ゼミ〕実行委員会の作成部分を包括しようとする〈正本〉が〈熊本〉等の大学の正規授業で使用され、〔自主ゼミ〕的な試み拡大の兆しが生じた。しかし、単位認定をめぐる問題で関係者間の分岐が顕在化、一方、'70年代中期から解放されてきた〈京都〉大学の占拠空間（A367）をめぐる司法を巻き込む〔自主ゼミ〕過程に突入していく。

その前後における松下の〈 〉氏への訪問や書簡は、職域を含む苦闘を共有しようとする配慮であったし、差し出された提起には〈 〉氏の負う生涯的テーマを捉え直す契機が示唆されていた。決して戦略的にのみなされたものではなかった。しかし、提起のみならず、松下に象徴される存在との交流自体が次第に重くなっていくようであった。能力と研鑽によって参入し得た職業的ステージを捨てることに繋がりがかねない闘争の根源性との距離感は埋めようもなく

広がってしまう。距離感に時間性を導入して自己の存在様式を維持しようとするものがきが痛いほど伝わってくる。「決定的に不十分」「重く受け止め」云々と表出される彼の煩悶は、他者や機構を闘争高揚期には激しく批判したその口をあささり拭って、テーマからの〈離脱〉を正当化した者（たち）によって、「坊主懺悔」と冷たく揶揄される始末だった。出会った頃の〈〉氏なら「てやんでい！人の禪で相撲とるてめえらほど腐ちゃいねえや」とケツのひとつもまくってみせたらうが、直接の反批判を迂回し、やがて、多くの松下批判者が辿ったのと同じように、戦後思想家の〈生活〉・〈対幻想〉といった思想的達成を自己の現状肯定の論理的盾とするようになっていった。〈連続シンポ〉ないし〈～103～被告団〉といった〈岡山〉的共同性への嫌悪感や、同伴的に見られていた者らへの反感を先行的に噴出させ、結果、松下を同列もしくは元凶として忌避するパターンが彼の場合も繰り返されたのは何を意味するのか。

〈岡山〉的試みをはじめ反感の対象となった者たちは、根源的提起に交差して情況域に浮上しようとする一方で、顕（潜）在する限界や誤りを最も厳しく松下本人から随時批判され続けている。そのような関係性を通過して届く複合的な声によって、権力の声以上の恫喝的幻聴が生ずるのは、自問の恣意性に干渉する〈文体〉の仮装を〈単線的〉に受け取るからである。自立的に自問を持続している状態なら、誤りや限界を抱えた無力な者どうしの相互批判と模索の過渡的現場性が見えるはずだ。一步踏み込むことで対等な関係を切り開いていく端緒を逆提起しえただろう。それができる人だった。

結局彼は、〈10年性〉のテーマの方を大学教師という職業と折り合いうる表現位相へと湾曲させ、新しいファシズムの先兵「大学闘争後の大学」が、〈幻想的地ならし〉の構造に呑み込んでいったのである。

しかし、こういう私の言い方に松下は〈否〉と言うに違いない。「大所からはそうも言うるが、主体の表現責任を過小に見つめるのは欺瞞である」と。

〈〉氏～は長年大学教師を勤めあげた今も、「松下存在の重量感から私は自由である。君の方こそいつまでも囚われ人なのだ」と言うだろうか。〈表現〉と〈生活〉という幻想性の折り合う秩序に充足する欲求の固定型を、マス化した社会の認識的集合は「自由ないし恣意性の回復」として奨励するだろう。だが、「一時期自分は松下に希望を見て共闘もしたが異和の内実を対象化する過程で失望したのだ。」とと思っている人がいるとすれば、それは逆である。〈松下〉的闘争の本質の方が彼（ら）の生涯的テーマに共闘しようとしたのである。辛く苦しい反目にさらされても、松下には彼らと同水準の失望感はなかった。各主体の表現過程に写像される情況的事実性を理解し、最終的な〈希望〉に向けて応用～組織することが問題であったのだ。それが、心ならずも存在するだけで他者に苦痛を与えてしまう自己の責任の取り方であった。

私たちは誰もある時期、いや、むしろ今現に在る一瞬、生涯時間総体を凌駕して、存在の晴れやかさに輝き、幻想性構造の調和に開かれているのではないだろうか。〈離反〉のテーマをめぐる紙一重の分かれ目は、そんな一瞬との〈対話〉の内実と〈行為＝表現〉に関係している。